

ば く り ゆ う
麥 粒

2010. Winter

麦粒 / NO. 114

発行・キリスト教センター

目 次

おまけのスズメ	小林 光 (2)
コミュニケーション力	沖 宏一 (5)
敗北から始まる	石田 聖実 (8)
敬神愛人は心をつなぐ人の輪に	秋元 浩一 (12)



おまけのスズメ

小林 光

二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。

(新約聖書 マタイによる福音書 10章 29節)

五羽の雀が二アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。

(新約聖書 ルカによる福音書 12章 6節)

今日は、「おまけのスズメ」という少し変わった題でお話をさせていただきます。マタイによる福音書 10章 29節では、スズメが二羽で一アサリオンです。しかしルカによる福音書 12章 6節では、スズメが五羽で二アサリオンと書かれています。この違いの意味するところは、本来は四羽で二アサリオンのところ、一羽が「おまけ」として付いてきたので五羽になったということでしょう。

昔、スズメが食用として市場で売られていた時代がありました。今では考えられないことかもしれませんが・・・。「昔は田んぼの稲をついばむ丸々と肥えたスズメを見て、美味しそうだなあと思ったことがあるよ」と、ご年配の方から聞いたことがあります。その美味しそうなおまけのスズメが安く売られ

ていて、庶民には手に入りやすい貴重な食べ物の一つになっていたようです。一アサリオンは今日の値段で500円位ですから、一羽は250円です。

安く売られていて、しかもおまけにされるような値打ちのない一羽でさえ、神様は忘れず覚えていて、その一羽をずっと見ていてくださるというのが今日の聖書の言葉の意味です。皆さんはスズメを見た時にどれも同じように見えて、違いは全く分からないと思います。しかし商売人にはスズメの違いが分かったそうです。おまけにしてもいいような弱ったスズメを見分けるのです。

私の友人に50頭位の牛を牛舎で飼っている人がいます。彼の家を訪れた時、彼の小学校1年生になる娘さんが私を牛舎に案内してくれました。その女の

子は牛一頭一頭の名前で呼んで、私に牛を紹介してくれました。「どうしてどの牛が分かるの?」と尋ねると、「顔がみんな違うからよ」と言うのです。これには驚きました。私にはどの牛も同じに見えるからです。

スズメの顔にも違いがあるらしく、毎日スズメを売っている商売人はそれが売り物になるか、ならないか、瞬時に判別し、売り物にならない一羽を「おまけ」として付けていたわけです。私たちには全く分からないことですが、プロの目には体が弱って売り物にならない、「おまけになるスズメ」が一目瞭然なのです。おまけを付けても損はない仕組みです。

その体の弱っている、値段も付かないおまけの一羽でさえ、神様はお忘れにならず覚えていてくださる、とイエス様はおっしゃいました。私はこの聖書の言葉を読むたびに、自分自身がまるでその「おまけの一羽」のような気がしてきます。

私は牧師になって20年以上が経ちますが、時々落ち込むことがあります。自分は何てダメな人間だ、説教なんて出来るような立場じゃない。あの先生のように素晴らしい話ができればなあ・・・とコンプレックスを抱いて自己嫌悪に陥ることがしばしばあります。皆さんはどうでしょうか? でもそんな時、この聖書の言葉が私を慰めます。神様は

この一羽のスズメを見ていてくださる。十羽一からげではなく、大勢の中の一羽を「かけがえのない一人」としてこの私のことを今日も見えてくださる・・・。そう想いをめぐらすだけで嬉しくなります。

数年前、私は「尿管結石」という大変重い病気を患いました。救急車で運ばれ、即入院となり仕事も出来なくなり、みんなから遅れをとっている自分の現状に、焦りを感じました。なかなか治らない、もう自分はダメかもしれないと思った時に、やはり今日のイエス様の言葉が力づけてくれました。体の弱い、売り物にはならず、はじかれてしまうようなそんな一羽でさえ、神様はしっかり見ていてくださる。神様のお許しがなければ、その一羽さえ地に落ちることはない! そう思っただけで心が温かくなって勇気が湧いてきました。

私たちは様々なことを経験してゆく中で、困難や葛藤に苦しみ、迷い、立ち止まってしまうことがあります。その度に、今日の聖書の言葉が皆さんお一人お一人の力となりますように。おまけのスズメ、その一羽さえ心に留めてくださる神様の愛が、あなたにも注がれているということをお伝えしたくて、今日、私はここで語らせていただきました。

(こばやしひかる 熱田教会牧師 2009.4.21 チャペルアワー奨励)



コミュニケーション力

沖 宏 一

私はこの名古屋学院大学を1989年に卒業いたしました。

本日はコミュニケーション能力について、皆さん方にお伝えしたいと思っておりますが、その前に、私の近況についてお話しいたします。

先ほどご紹介を受けましたとおり、私は株式会社スズケンという医薬品卸の会社に勤務しており、現在、監査室に在籍しています。スズケンはグループ会社も含め、全国47都道府県すべてに拠点をおいておりまして、毎月、どこかの営業所を訪問し、内部監査を実施しております。

皆さんは監査という仕事に関して、どういったイメージをお持ちでしょうか。怖そうだとか、お役所的、厳格といった感じで、あまり良い印象をお持ちの方はいらっしゃらないかと思っております。そこで、簡単に監査業務についてお話ししたいと思います。

監査という仕事は、会社で働く人たちがルール(法・規程)に基づいて、業務を遂行しているかを調査して、もし誤りがあればそれを指摘するといった内容です。昨今、コンプライアンスという言葉をよく耳にするかと思

ますが、会社の不祥事を内側から防止するといったことが主な仕事であります。調査した結果を、社長や経営管理者層に報告しますが、営業所でヒアリングをしたり面接したりするときに、コミュニケーションがないと、種々な情報が収集出来ません。例えば、誤った情報収集により事実と異なるケースが多々出てくると思っています。そのため、監査に必要なスキルとして、専門的な能力や客観性が求められますが、最も重要な能力として、コミュニケーション力が挙げられます。私から特に皆さんに申し上げたいことは、社会において、このコミュニケーション力が大変重要になってきますので、早速皆さんも大学生活において、この力を向上させる訓練をして頂きたいということなのです。

コミュニケーション力といっても、ピンと来ない方もいらっしゃると思いますが、つまり‘お互いの感情を理解し合い、互いの真意を理解し合う能力。感情面に気を配って真意を分かち合い、信頼関係を築いていく能力’であります。皆さん、友達や

恋人との間でのコミュニケーションはしっかり取れているでしょうか。サークル内の先輩や後輩、アルバイト先の上司や部下との関係はいかがでしょうか。しかしながら、コミュニケーション力の不足を感じている方がおられたとしても、決して心配はいりません。それは持って生まれた才能ではなく、誰もが努力すれば向上する能力だからであります。コミュニケーションに関して、自分自身の苦手とするところを知り、その克服に積極的に挑戦し、自分のマイナス面をプラスに転換する努力こそが大切になってきます。

名古屋学院大学の建学の精神をみても、自分を愛するように他人を愛することが出来ますように、また人間の力を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認めるような人へと成長を遂げることが出来ますようにという「敬神愛人」であります。ここにも実は、コミュニケーション能力の大切さについて語られている面があるかと思えます。皆さんは、とても恵まれた環境で勉強されておられると思えます。

私の場合、コミュニケーション力を高めた初めのきっかけは、大学時代の寮生活でありました。当時、瀬戸のキャンパスの敷地内に友愛寮という大学の寮があり、そこで1年間生活しておりました。二人一組の相部屋で、北は長野県から南は沖縄県の出身者がいて、全員で30名ほどおり

ました。土日以外は食事の時間や入浴時間のスケジュール管理がされ、テレビも持ち込み禁止で食堂に1台あるだけ、また携帯もない時代で、ピンクの公衆電話1台を皆で共同使用していました。私は石川県出身ですが、生活環境も実家にいるときと全く異なっており、苦痛を強いられました。ただ、その不便さによりかえって、寮生との間で色々な話をする時間が出来、コミュニケーションの機会が増え、楽しい寮生活の思い出となったのです。そして、お互いを尊重し合い、相手を思いやる気持ちを育む経験になったと思います。相手を思いやる気持ちを常に意識することは、コミュニケーション能力を向上させる上で大切なことであります。そのためには相手の話をしっかり聞くこと、相手の真意やこちらへの期待を理解することが必要であります。そして、相手の長所は大いに褒めましょう。褒められて誰も悪い気はしないはずですが、またもちろん短所を相手に気づかせるということも必要ですが、伝えるときは相手の気持ちを考慮しながら、お互いにとってのメリットを探っていくことが大事であるといえます。

常に相手を思いやる気持ちを、絶対に忘れないでください。特に親御さんに対しては、大学に通わせてもらっている事への感謝を、忘れないようにしていただきたいと思えます。そのおかげで、高校時代とは全く違った

新たな出会いや経験が出来ているのですから…。大学生活で培ったことが、皆さんの人生において後々プラスになってくると思います。

また、定期的に自分を見つめ直す時間もきちんと設けてください。私は寮生だった頃、月に1度チャペルに足を運び、そこにおられたスタッフの方々から聖書を学んだり、話を聞いてもらったり、自分と向き合う時間を作っておりました。落ち着いた場所で、じっくりと考えをまとめる

良いひと時でありました。是非、この大学のチャペルアワーやカレッジアワーで色々な方から話を聴いてください。そして、これからの社会でますます必要になってくる、コミュニケーション力を豊かに身に付けてください。せっかくこの恵まれた環境の中で、皆さんは過ごしているのですから、悔いのないよう、充実した学生生活をおくっていただきたいと願っております。

(おき こういち 本学OB 2009.7.16 カレッジアワー奨励)



敗北から始まる

石田 聖実

人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって齒ぎしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足元に置いた。人々は石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。

(新約聖書 使徒言行録7章54～8章1節)

イエス・キリストのことを皆さんご存知かと思いますが、今から2千年ほど前に、ユダヤ、ガリラヤやエルサレムの辺りで活動され、十字架にかけられた人です。イエス・キリストが十字架で殺されたのは、ユダヤ教の祭りでは一番大事な「過越しの祭り」というお祭りの期間中のことでした。季節でいうと、春分の日より少し後の3月の下旬～4月にかけての頃であります。

イエスは殺害されましたが、聖書によると死後三日目に生き返ったとあります。イエスが十字架で死んで終わっていたのなら、キリスト教という宗教はできなかったと思います。しかし、イエスの弟子たちはイエスが甦ったこと

を、怖くて他の人たちには言えずにいました。なぜなら、イエスを十字架にかけた人たちが、今度は自分たちを殺しにかかるのではないかと恐れたのです。ところが、過越しの祭りから50日目にあたる「5旬祭」、英語では「ペンテコステ」といいますが、その日が来たときに、これまで死を恐れていた弟子たちが突然、力を授かり、「神がイエスを復活させた。イエスこそメシア(救い主)である」と人々に伝え始めたのです。

弟子たちは、イエスこそ救い主だと人々に述べ伝えはじめました。使徒言行録の2章に、聖霊が弟子たちのもとに降って、彼らは力強くイエスの復活

を公言し始めたとあります。そして4章のところ、ペトロとヨハネという二人の弟子が、エルサレムの神殿の門のところにいる、足の不自由な男を歩けるようにしたという出来事が書かれています。その際、この二人の弟子たちが「イエス・キリストの名によって立ち上がりなさい。」と告げたことで、ユダヤ教の当局は「イエスの名によって話したりしないように」と、厳しく彼らに警告しました。しかし、「我々は人間に従うのではなく、神に従う」といって、彼らはイエスの名によって行動することを止めなかったのです。

こうしてますます、ユダヤ教当局からの締めつけが厳しいものとなってきました。そのような中で、ステファノという人が現れます。今日の聖書箇所に出てきますが、大変信仰の厚い人で、イエスを救い主と信じるグループの中では執事の職を与えられておりました。ここでの執事というのは、貧しい人々のケアをするために設けられていた職でありました。聖書に詳細な記載はされていませんが、恐らくこの人は、後のキリスト教のリーダーの一人になった人物であろうと私は想像しております。ところが、ステファノがユダヤ教の司令部を含む多くの人々に、「あなたがたが十字架につけて殺したあのイエスが・・・！」と言ったものですから、聴衆は不愉快に思い「こんな奴は生かしておけない、すぐ殺してしまえ」と暴挙に走ります。そして、正しい裁判の手続きを経ないまま、総督

の不在をいいことに、勝手にステファノを町の外に引きずり出し、ユダヤの伝統の方法で殺してしまったのです。

これは当時のローマの法律からいえば、違法であります。どのような方法で彼を殺したかといいますが、群衆が彼を取り囲み、石をぶつけるというやり方です。将来を囑望されたステファノがこうやって殺されてしまい、キリスト教はますます力を失っていくかのように思われました。ところが事実はそのようではありませんでした。キリスト教という名前が消えていくどころか、むしろどんどん、'イエスという方こそ救い主だ'と信じる人々が増えていったのです。このステファノの受刑について書かれている今日の聖書箇所でも、彼は投石される痛みで遠のいていく意識の中で、一体何を見ていたのでしょうか。自分を殺そうとしている人々の悪行でしょうか？ そうではなく、彼は神様を見て、同時にそこにイエス・キリストが立っておられたのを見ていたのです。そして60節に書いてあるように、「この罪を彼らに負わせないでください」と叫んだのです。

私たちが何かを主張する時に、通常自分がこれは正しいと思っていることを言い通します。ステファノはイエスこそ救い主だと信じました。投石している人々は、イエスなんてとんでもない奴だと思っていました。自分が正しい、相手が間違っていると思ったときに、相手のために神様に祈るなど、誰が考えるのでしょうか。むしろ、相手が

裁かれることを祈るのが自然ではないでしょうか。このステファノの、相手の罪の赦しを祈りながら死にゆく姿は、かつて十字架の上でイエスが、自分を死刑に追い詰めた人々のために、祈りながら死んでいった姿を彷彿させるものでした。「父よ、彼らをお許してください。彼らは自分が何をしているのか分からないでやっているのですから」とイエス・キリストは祈りながら死んでゆきました。

このステファノの様子をじっと見ていたサウロという人がいました。彼は大変有能な人物で、今でいえばトルコからエルサレムに留学してきて、当時、そこで有名な律法学者だったガマリエルという人の弟子になりました。サウロ自身も立派なファリサイ派の律法学者に成長し、ナザレのイエスとその一派に強い反感を抱いていたのでした。サウロはイエスの迫害に加担しましたが、彼のキリスト教嫌いは相当なものでありました。ところが、ステファノが何も抵抗することもなく、最期まで神に祈りながら死にゆく姿を見て、多分、何か心にひっかかるものを感じたのでしょう。それから彼はキリスト教をどんどん迫害し続けますが、シリアのダマスコまでいく途中で遂に、自分を見失っていたことに気づくのです。一体自分は何をしているのか、何を信じているのか、何が本当に正しいことなのか分からなくなっていたのです。そんな時、彼の脳裏に浮かんだのがステファノの死でありました。なぜ

あのような死に方が出来たのだろうか、自分を迫害する者たちが赦されるように、神に祈りながら逝くことができたのだろうか……。そう思った時に、サウロは全く目が見えなくなっていたことに気づくのです。これまでユダヤ教に信心を抱いてきた理由が分からなくなりました。結局、サウロは捕らえようと思っていたクリスチャンの家に入って行きますが、そこで祈りをしてもらい、彼の目からウロコのような物が落ちたと聖書にあります。‘目からウロコ’ということわざはこれが語源となっています。今まで自分があれほどまで迫害していたイエス・キリストのあり方、そしてそれを真似たステファノの死にゆく姿の中に、自分を殺そうとする者さえ愛する彼らの生き方が、本当のものではないかという真理を見出していたのです。

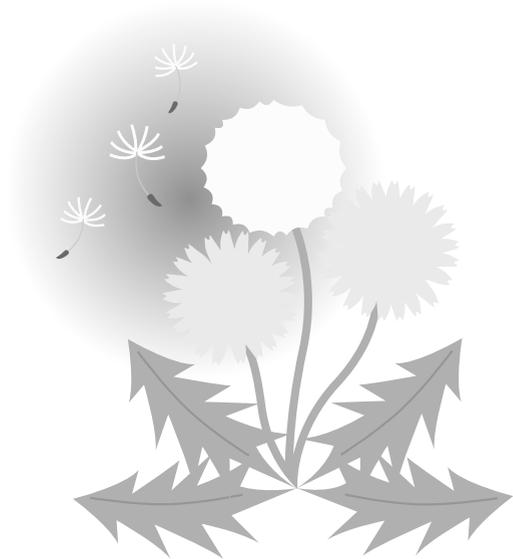
私たちはいつも、自分の目前にあるさまざまな問題に対して、一生懸命に打ち勝とうとします。しかし、イエス・キリストとステファノは、いかなれば打ち勝つことが出来ず、敗れ殺されてしまいました。でもそれは、本当の意味で敗北と言えるのでしょうか？この敗北している姿こそが、人の心を打っていたのではないのでしょうか。すべての力を行使して、相手をねじ伏せていくよりもっと強い力が、私たちの負けの姿にはあるのではないかと……。こういうふう思うのです。

私たちが自分の力では太刀打ちできないその時、実は、神様が働いてくだ

さるという真理を、キリストの福音は
もたらしているのです。私たちが生き
ていく中では、人の心に何かを訴える

敗北や、死に方もあるのだというこ
とを、みなさんも是非憶えておいて欲し
いと思います。

(いしだきよみ 尾陽教会牧師 2009.6.16 チャペルアワー奨励)



敬神愛人は心をつなぐ人の輪に

秋元 浩一

鹿児島生まれ、鹿児島育ちの私が、幼少の頃を思い浮かべ思い出すのは、ウミガメの卵が八百屋の店先に並んでいたことです。それは、触るとプヨプヨとしたピンポン球ぐらいの大きさです。ウミガメの卵が食用として売られていたのです。驚かないで下さい。鹿児島の八百屋さんが野蛮なわけではありません。

食べるものがそんなに無い時代、口に出るものは何でも食べないと生きていけない、そんな時代だったのです。

ウミガメの卵が八百屋の店先に並んでいた頃、戦争の時の防空壕を家がわりに生活している人も沢山いましたし、普通の家でも、食事は、サツマイモと目刺しという思い出があります。そんな幼少の頃、鹿児島の城山、西南戦争に敗れた西郷隆盛が自決した山としても知られていますが、その下に、島津育昭公を祭った照國神社という神社がありました。その近いところに、ザビエル教会がありました。鹿児島カテドラル・ザビエル教会、キリストの福音を日本に初めてもたらした聖フランシスコ・ザビエルを記念して建てられたカトリックの教会ですが、貧しい暮らし向きの中で、憧れの念をもって教会を見あげていました。教会に対する当時のイメージは「学生時代」という歌、

「薦のからまるチャペルで祈りを捧げた日、夢多かりしあの頃の思い出をたどれば、・・・」というシーンが重なります。そんなザビエル教会を、1、2回のぞいたことがありました。

時は移り、アメリカのノースカロライナ州で生活することになりました。アパートを借りて、アメリカでの新生活スタートというとき、友人のひとりから、「今日は教会の日だから、一緒に行くよ」と誘われたのです。一瞬、「ちょっと、予定が・・・」、と言いかけたら、「アメリカで生活するのだから、週に2回の教会の日には行かなきゃ」とまくし立てられ、更に、ひと言、水曜の夕方だったのですが、「今日は、教会で食事が出るしゲストとしてみんなに挨拶もすることになっているから」と、有無をいわさず連れていかれました。

行った教会は、バプテスト教会でした。日本では、祖母に連れられてお寺へ何度か訪れたことがありましたが、集まった顔ぶれはまるで違って、若い人がとても多く雰囲気明るいですね。「あ、いいな」と好感をもち、それからは、直接、ひとりで出かけるようになったのです。日曜は朝から教会で集まりがあり、ちょうど、コミュニティの場のようになっていました。月に1度、教

会への献金を集める帽子が回ってきましたが、収入の10%を目安にささげると言っていました。いろいろ感じるものがありました。アメリカの友人の歌がうまいのは、幼いときから、教会の賛美歌で鍛えられていたからなのかと合点したり、税金を払って更に教会に寄付するなんて、なんて太っ腹なんだとか、考えさせられました。

ある日、日曜の礼拝が終わって車の方に歩きかけたときのこと、見知らぬアメリカの若者に、「ねー、お昼一緒にしない？」と声をかけられて、彼の家に彼の友だち数人と一緒に行き、お昼をごちそうになることになりました。会話の中で、「日本の教会は、どう？」と聞かれたのです。実は、まともに日本で教会に行ったことがなかった私は焦ってしまいました。幼い時に、1回か2回、訪れたかすかな記憶しかないのです。でも、そのかすかな記憶を頼りに、「日本では、教会って、人々のあこがれみたいなのところがあるよ」と、答えたところ、続いて、「で、活動はどんな風なの？」と聞いてきました。まいったなあ、質問に、答えられない。で、仕方なく、「実は教会のこと、良く分からないんです」と答えたところ、みな、「えっ！日本で教会に行ったことないの？」とびっくりされてしまいました。みなさんは、こうやって、大学の教会に来ていますから、食事に呼ばれても日本の教会のことについて大丈夫、話できますから、安心ですね（笑）。

そんなことがあってから色々な集まりに参加する機会も増え、新たに知り合っ

た人と別の教会へ出向いたりするうちに、友達の輪が広がり、楽しくも忙しい週末がそれから続くことになりました。ラジオ局のアナウンサー、陸軍大佐、気のいいおばあちゃん、と色々な人と楽しい時間を創ることが出来たのです。教会を通じた人の輪は、心をつなぐ人の輪になると信じることができました。

鹿児島の話に戻りますが、西郷隆盛を皆さんご存知でしょうか。篤姫の番組でも登場しました。明治維新の立役者で、勝海舟と共に話し合っ、江戸の町を戦火から救った薩摩の英雄です。この西郷隆盛が人生最大の挫折の末にたどり着いた西郷の哲学って、知っていますか？それは「敬天愛人」っていうんですよ。敬天・・・すなわち、「この世や万物を創造したのは天で、人それぞれには天から与えられた天命があり、これに従って人は生きているのだから、天を敬うことを目的にしなければいけない。天は人々を平等に愛しているということを知って、天が皆を愛するように、自らも真心をもって他の人を愛することが大事だ」という教えです。敬天、すなわち、天を敬うということは、愛人、すなわち、人に慈しみの心をもって接するということなのです。

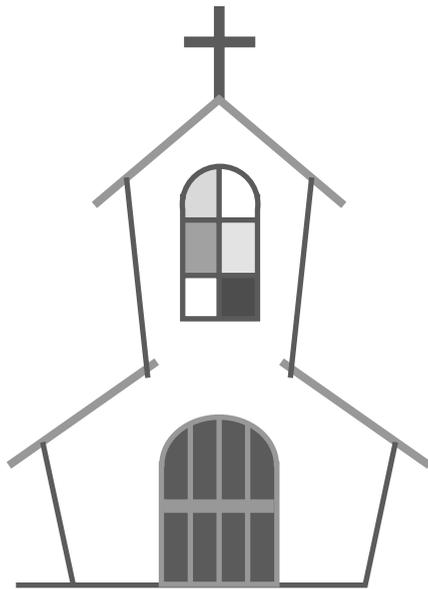
この「敬天愛人」は本学の建学の精神である「敬神愛人」に通じる概念です。西郷南州顕彰館で敬天愛人と聖書展という催しがあったときに、西郷隆盛は聖書を読んでいたことが紹介されてい

ました。近代日本を導いた幕末から明治の偉人、西郷隆盛の哲学「敬天愛人」は聖書の「敬神愛人」を受けた「西郷の天命への自覚」だったといえるようです。

人生、生きる上で何が最も大事かということについて、マタイによる福音書 22章37節から40節の中に記されています。要約しますと「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」。人生

の指針はこのふたつの考えの上に成り立ちます。この心を私たちは、「敬神愛人」と呼び、名古屋学院大学の教育研究の理念としています。自らの利益を省みず、人のために尽くして生きることを心に留めておけば、自らも人に支えられます。「敬神愛人」を基盤にした名古屋学院大学からこれからも世界に、支え合う人の輪、心をつなぐ人の輪が大きく育つことを信じて、私からの今日の話題とさせていただきます。

(あきもとこういち 商学部教授 2009.7.9 カレッジアワー奨励)



チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纒)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
- こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別 -
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人? - 間(はざま)から読む聖書」
(金 永秀)